

## アヴィダーナ発生母胎としての 根本説一切有部律彙事

平 岡 聡

### I

律文献は本来、出家者の遵守すべき戒律の条項やその注釈、また教団運営上の規則に関する典籍であるが、様々な戒律や規則が制定されるに到った因縁譚をも併記するのが普通である。律文献は様々な部派によって伝授されているが、(根本)有部の伝授した根本説一切有部律 (MSV, edited by Dutt, 1947-1950) はその内容や分量において他の諸律を遙かに凌ぎ、説話の室庫となっている。この律文献から説話を抽出して編纂されたと考えられる仏典の一つに Divyāvādāna (Divy., edited by Cowell and Neil, 1886) がある。従って MSV と Divy. との間には数多くの平行話が存在することになるが、この両者の関係を巡って、ユベール<sup>1)</sup>などは MSV を、プシルスキーなどは<sup>2)</sup> Divy. をその源泉であるとみなした。日本で前者の立場を取るのは岩本裕や松村恒であるが、その根拠として Divy. の幾つかの説話の冒頭が唐突であることを挙げている<sup>3)</sup>。

私も MSV が Divy. に先行するという立場を取り、すでにその論証を拙稿において発表した<sup>4)</sup>、そこで用いた手法の一つは、ユベールの「Divy. の編纂者は、一旦もとの場所から切り離されれば、もはや存在理由のない文章を取り除くべきであると判断さえしなかったのである」という指摘に基づき、文脈重視という方法であった。無論、説話の冒頭の唐突さといった形式面からの考察も必要であろうが、それだけでは説得力に乏しく、内容面からの考察が不可欠である。そこで本稿では Divy. 第 30 章 Sudhanakumārāvādāna (SA) を手がかりにして、MSV と Divy. との前後関係を考察し、さらにはこの SA と兄弟関係にある他のアヴィダーナ、即ち Māṇḍhātāvādāna (MA) や Mahāsudārśanāvādāna (MSA) の出自にも考察を加えてみたい。

## II

まず最初に Divy. 第 30 章 SA を取り上げることにする。この章は、仏陀の今生であるスダナ王子が幾多の困難を乗り越え、一度は離ればなれになった恋人でキンナリーのマノーハラーを深し出す恋愛物語であるが、この冒頭部分は岩本や松村の指摘するように唐突な始まり方をしているので紹介しよう。

「更にまた、大王よ、私は無上正等菩提を得るために布施を行い、福德を積み、更に精進波羅蜜を成満しても、無上正等菩提を獲得することは出来なかったが、その話を聞かれるがよい」(Divy. 435.2-4)

このように、いきなり「更にまた、大王よ (namaḥ punar api mahārāja)」という奇妙な出だしでこの章は始まり、非常に唐突な感じを受ける。また「大王よ」とあるが、これだけでは、それが誰を指しているのかが理解できない。この部分に関しては、写本に乱れがあることを校訂者自身が脚注で指摘している<sup>5)</sup>、またこのアヴィダーナを和訳した奈良康明は「この冒頭部分は幾分唐突で原文に脱落が予想されるが、他の伝承から見て、ブッダがビンビサーラ王に物語る形式をとっている」<sup>6)</sup>と注記している。続いてこの章を締めくくる最後の部分を見てみよう。

「私はマノーハラーのために、力・精進・勇気を示し、十二年間、滞りなく祭式を挙げたが、私はそれによって無上正等菩提を獲得したのではない。そうではなく、その布施とかの精進とは [私が] 無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」(Divy. 461.2-6)

この部分も意味するところが曖昧であり、このような表現は Divy. の文脈では意味をなさない。そこで MSV に立ち戻ってこの章を吟味してみる必要がある。この章もそっくりそのまま MSV の彙事に平行文が見られるが、そもそもこの話が語られる発端となったのは、そのずっと前に位置する次のような物語である。

ある貧しい町の洗濯婦は鉢の破片に少量の油を買い求めて灯明を灯し、それを仏陀に布施して誓願を立てると、仏陀は彼女に無上正等菩提の記別を授ける。それを知ったコーサラ国王プラセーナジットは財力に物を言わせて千もの油壺を手に入れて灯明の環を形作り、それを布施して自分にも無上正等菩提の記別を授けてくれるように仏陀に懇願すると、仏陀は王にこう告げる。

「大王よ、無上正等菩提は深遠である。深遠な光彩を放ち、見難く、覚り難く、思慮できず、思慮を越えた領域を有し、微細で、微妙で、賢者の智によって [のみ] 知られるべきものである。あなたが一つの布施や百の布施や千の布施や百千の布施を以てしても [無上

正等菩提の] 成就是容易ではない。大王よ、あなたが無上正等菩提を求めるのであれば、しっかりと布施をしなければならぬし、しっかりと福德をなさねばならぬし、善知識に仕え、尊敬し、奉仕しなければならぬ。そうすれば、あなたはいつか世間で最高の導師となるであろう」と。このように言われると、コーサラ国の王プラセーナジットは涙を流して泣いた。その時、コーサラ国の王プラセーナジットは衣の裾で涙を拭いながら、世尊にこう申し上げた。「大徳よ、無上正等菩提を求める者はどれほどの布施をしたり福德を積むものなのですか」と。世尊は言われた。「大王よ、過去の劫はしばらくおくとして、この同じ賢劫において、無上正等菩提を求めていた私は様々な種類の布施をし、福德を積んだが、それをしっかりと聞き、上手く作意されるように。では説くでしょう」(MSV 1, 92.1-15)

これは「貧女一灯」として知られる物語であるが、仏陀はプラセーナジット王に、自分が過去世で実践してきた布施の話をして聞かせるが、その意図は「この私がそれほどの布施をしても、それは無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのだから、王の行った布施くらいでは無上正等菩提の記別に値しない」ことを説くことにあることが分かる。さてここで説かれる仏陀の過去世における布施物語を纏めると、次のようになる。

- ① マーンダータ王 (MSV 1, 92.16ff)
- ② マハースダルシャナ転輪王 (MSV 1, 97.11ff)
- ③ ヴェーラーマ姿羅門 (MSV 1, 98.12ff)
- ④ クシャカ転輪王 (MSV 1, 99.10ff)
- ⑤ トリシャンク王 (MSV 1, 109.12ff)
- ⑥ マハーデーヴァ転輪王 (MSV 1, 111.18ff)
- ⑦ ニミ転輪王 (MSV 1, 112.17ff)
- ⑧ アーダルシャム力王 (MSV 1, 114.7ff)
- ⑨ スダナ転輪王 (MSV 1, 122.20ff)

このように全部で九つの物語が説かれ、またこれらの物語の出だしは、二番目のスダルシャナ王の過去物語以降、⑧を除けば「また、大王よ」で始まり、また連結の最後には必ず「この布施は無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」という定型句が置かれている。そして最後のスダナ転輪王の過去物語が説かれた後で、今問題にしている、SA が、「更にまた、大王よ、私は無上正等菩提を得るために布施を行い、福德を積み、更に精進波羅蜜を成満したが、無上正等菩提を獲得することは出来なかった。その話をお聞きになられるように」という出だしで説かれ、またこの過去物語が終わった後

で、仏陀自身が「私はマノーハラーのために、力・勇猛さ・勇気を示し、十二年間、滞りなく祭式を挙行したが、それによって私は無上正等菩提を獲得したのではない。そうではなく、その布施とかの精進とは[私が]無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」と説かれて、この物語は終わるのである。このようにこれら一連の過去物語は、僅かな布施で無上正等菩提の授記を懇願したプラセーナジット王を諫める目的で説かれていることが分かるのである。

こうしてみると、このSAはその出だしも締め括りの定型句も、また「大王よ」という呼びかけも、「僅かの布施で無上正等菩提の記別を授かるうとしたプラセーナジット王を仏陀が自分の過去世での布施物語を説いて諫める」というMSVの文脈において始めて意味をなすのであり、この部分だけが切り取られてDivy.に収められたのでは全く意味をなさないのも当然である。この用例は、MSVの説話がDivy.のそれに先行するというを如実に物語っていると考えられる。奈良はその和訳で、冒頭部分が唐突であり原文に脱落が予想されることを指摘したが、冒頭部分の唐突さは原文の脱落に起因するのではなく、文脈を無視した抜粋から生じた結果と言えよう。またここでの「大王よ」という呼びかけも、奈良が指摘するように「ピンビサーラ王」ではなく、MSV業事のコンテクストで見ると、これは「プラセーナジット王」を意味することになる。

### III

では次にこのSAと兄弟関係にある二つのアヴァダーナ、即ちMAやMSAについても同様の見地から考察を加えてみたい。この二つのアヴァダーナはギルギット写本(GM)の中に存在し<sup>7)</sup>、そのコロフォンにも明確にMāndhātāvādānaあるいはMahāsudarśanāvādānaというタイトルが確認されるので、単独の、あるいは独立のアヴァダーナとして扱われていたことが分かる。この二つのアヴァダーナはすでに見たように、僅かの布施で無上正等菩提の記別を願ったプラセーナジット王を仏陀が諫める目的で説いた説話の一つであり、その始めと終わりとは、今ここで取り上げたSAと同様の定型句を共有していた。ただし両者ともにその反復を嫌って、前者は「詳しくは『中阿含』の王相応部にある「マーンダータ経」にあり(vistareṇa māndhāṭṣūtraṃ madhyamāgame rājasamyuktanipāte)」(MSV 1, 93.10)、また後者は「詳しくは『長阿含』第六部にあるマハースダルシャナ経にあり(vistareṇa mahāsudarśanasūtre dīrghāgame ṣaṭsūrikanipāte)」(MSV 1, 97.13)として省略され、また

GMのようにコロフォンも存在しない。従ってGMに含まれる幾つかのアヴァダーナはMSV薬事から抜き出され、自派の伝授した阿含乃至は律蔵中の話から省略された部分を補って、独立したアヴァダーナを形成したものと思われる<sup>8)</sup>。

そこでGMに見られる二つのアヴァダーナのうち、先ずMAを見てみよう<sup>9)</sup>。冒頭部分は欠損しており、「更にまた、大王よ」という出だしは確認できないが、連結の後には次のような記述が見られる。

「私はこのように有情を利益したが、これによって無上智を獲得したのではなかった。そうではなく、これは [私が] 無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」(整理番号 1448.8-1449.1)

この後、GMではMSV薬事には見られない二つの過去物語が新たに付与され、さらにこれを増広したものがDivy. 第17章のMAであると熊谷泰直は指摘する。では次にMSAを見てみよう<sup>10)</sup>。この冒頭部分は次のように始まっている。

「更にまた、大王よ、私は無上正等菩提を求めて有情を利益したが、その話をお聞きになられるように」(整理番号 1451.8&1550.1)

また最後は次のような一節で終わっている。

「大王よ、実に私はこの布施により、布施の分与により、無上正等菩提を獲得したに違いないと、このように見てはならない。そうではなく、この布施は [私が] 無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」(整理番号 11567.7-8)

これらの事実から、GMの二つのアヴァダーナ<sup>11)</sup>もMSV薬事の話のベースにしていることが理解されよう。Divy. の第2章から第7章まではMSV薬事からシステマティックに抜き出され、そして最後の第7章Nagarāvalambikāvadānaに相当する「貧女一灯」の説話を軸にして様々な仏陀の過去物語が説かれることになるが、そのうちあるものはGMやDivy. へ、またあるものはGMを経てDivy. へ、という変遷を辿ったことが確認された。これを一覧表に纏めて、MSV薬事とそこから独立したアヴァダーナの全体像を示すと次の通り。

#### ■薬事の出典とそこから独立したアヴァダーナの一覧<sup>12)</sup>

- ① (Khe276a8-Ge7b3) [Pūrṇa] → Pūrṇāvadāna (Divy. 2)
- ② (Ge26b2-33b4) [Maitreya] → Maitreyāvadāna (Divy. 3)
- ③ (Ge88a5-89b7) [Brāhmaṇadārikā] → Brāhmaṇadārikāvadāna (Divy. 4)
- ④ (Ge103a7-104a6) [Stutibrāhmaṇa] → Stutibrāhmaṇāvadāna (Divy. 5)
- ⑤ 73.16-79.2 [Indrabrāhmaṇa] → Indrabrāhmaṇāvadāna (Divy. 6)
- ⑥ 79.3-91.6 [Nagarāvalambikā] → Nagarāvalambikāvadāna (Divy. 7)

- ①92.16-97.8 [Māndhātṛ] → MA (GM) → MA (Divy. 17)  
 ②97.9-98.9 [Mahāsudarśana] → MSA (GM)  
 ③123.15-159.16 [Sudhanakumāra] → SA (Divy. 31)  
 ④ (Ge208a8-214a4) [Viśvantara] → Viśvantarāvādāna (GM)  
 ⑦ 241.1-255.10 [Mendhaka] → Mendhakāvādāna (Divy. 9-10)

#### IV

Divy. 第30章 SA を手がかりにしながら、MSV と Divy. の前後関係を考察して MSV が Divy. に先行することを論証し、その結果を踏まえて、これと兄弟関係にある二つの独立した GM のアヴァダーナ、即ち MA と MSA も併せて考察の対象としたが、いずれの説話も「貧女一灯」として知られる町の洗濯婦の布施と授記の物語を起点にした MSV の業事を発生の母胎としていたことが理解された。そして各アヴァダーナに見られる「更にまた、大王よ」という冒頭部分と、「無上正等菩提を得るための単なる因、単なる縁、単なる資糧にすぎなかったのである」という最後の部分に見られる定型句、特に後者は有機体の DNA にも喩えることができよう。即ち、どんなに増広・改編されて独立したアヴァダーナの体裁を取っていても、この定型句を有している限り、その母胎は MSV の業事であり、またこの定型句を共有する説話は兄弟関係にあるということを証明することになるからである。また前出の一覧表からも分かる通り、「貧女一灯」の説話以前では、Divy. 第2章から第7章までが組織的に、また以降では Divy. 第9-10章が抽出されているので、全体として見た場合、MSV の業事は実に数多くの独立したアヴァダーナを産出したことになり、Divy. や GM において独立するに到ったアヴァダーナの発生母胎になっていたことが理解されたと思う。

- 
- 1) M. Ed. Huber, 'Les Sources du Divyāvādāna (Etudes de Littérature Bouddhique V),' *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 6,1906,1-37. Cf. S. Lévi, 'Les Elements de Formation du Divyāvādāna,' *Toung Pao* 8,1907,105-122 ; H. Lüders, *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta*. Kleinere Sanskrit-texte 2 (Leipzig:Deutsche Morgenländische Gesellschaft), 1926,77-132 ; D. R. Shackelton Bailey, 'Notes on the Divyāvādāna I,' *Journal of the Royal Asiatic Society*, 3-4,1950,166-184, esp. 166-167.
- 2) J. Przyłuski, 'Fables in the Vinaya-Pitaka of the Sarvastivadin school,' *Indian Historical Quarterly* 5,1929,1-5. Cf. 石上善応「Pūrṇāvādāna について」『印度学仏教学研究』2-2,1956,137-138.
- 3) 『岩本裕『仏教説話研究第一 仏教説話研究序説』1967,135;松村恒「聖典分類形式と

してのアヴァダーナの語義』『今西順吉教授還暦記念論集 インド思想と仏教文化』東京：春秋社，1996,257-287, esp. 286.

- 4) 'The Relation between the Divyāvādāna and the Mūlasarvāstivādinaya —The Case of Divyāvādāna Chapter 31—' 『印度学仏教学研究』39-2,1991,17-19, of. 平岡聡『『デイヴィヤ・アヴァダーナ』と根本説一切有部毘奈耶』『仏教文化研究』40,1995,9-22, 'The Relation between the *Divyāvādāna* and the Mūlasarvāstivāda Vinaya,' *Journal of Indian Philosophy*, 26-5,1998,419-434.
- 5) Begins thus in BC : A omits namaḥ and writes devo 'pi (a page from end of xxxix) punar api continuously. D omits the whole tale. Beginning lost? (Divy. 435.28-29)
- 6) 奈良康明『〈釈迦と仏弟子の物語〉2 仏弟子と信徒の物語 アヴァダーナ』東京：筑摩書房，1988,117.
- 7) Raghu Vira and Lokesh Chandra, *Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition)*. Śata-Pitaka Series, Vol. 10.1-10, New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1974.
- 8) なお、梵文原典を翻訳する際、原典で「詳しくは…にあり」として省略されている部分を、漢訳者はそのまま翻訳するのに対して、蔵訳者はその省略された部分を補って訳す、所謂「水平化 (harmonization)」の行われることが松村よって報告されている。松村恒「西蔵語訳律蔵における水平化の問題」『日本西蔵学会々報』40,1994,11-17.
- 9) これに関しては次の研究がある。熊谷泰直「Gilgit 写本 Mādhātāvādāna 翻刻」『佛敎大学大学院紀要』22,1994,18-39. Cf. 熊谷泰直「Mādhātāvādāna の研究—Gilgit 写本をめぐる—」『印度学仏教学研究』41-1,1992,78-81.
- 10) これに関しては次の研究がある。Hisashi Matsumura, *The Mahāsudarśanāvādāna and the Mahāsudarśanasūtra*, Bibliotheca Indo-Buddhica No47, Delhi: Sri Satguru Publications, 1988.
- 11) またここでは梵文原典に欠損が見られるために取り上げなかったが、GM に含まれるもう一つのアヴァダーナ、即ち Viśvantarāvādāna も業事から独立したものと考えられる。
- 12) 出典はダットのエディションである。なお、MSV の業事には部分的に欠損が見られるので、梵文原典がない部分は、( ) 内に蔵訳の北京版の出典を記したが、番号は総て 1030 なので、本文ではこれを省略した。[ ] に記したのは、その物語の主人公の名である。

〈キーワード〉 Divyāvādāna, Sudhanakumārāvādāna, 根本説一切有部律, アヴァダーナ  
(京都文教大学講師)